

草鞋（わらじ）と草履（ぞうり）

今号から、毎回のテーマをしりとり形式で繋げていく「尻取りレーえっせい」を連載します。筆者は、前の筆者が書いたエッセイのタイトルの最後の文字で始まることばを自由に選び、そのことばをタイトルにしてエッセイを綴ります。タイトルも内容も、マンションに関係するものになるとは限りません。どんなしりとりになるのか、どんな展開になるのか、どんな筆者が登場するのか予測不能。わくわく、ハラハラの「尻取りレーえっせい」のスタートです。

マンションドクターニュース新連載企画「尻取りレーえっせい」を書くように依頼を受けた。1番バッターとのこと、1番が「ぼてぼてヒット」でも出塁しなければ試合が面白くないのではないかと思う。さて何を書くかと考えたとき、趣味というほどでもないが日頃から作っているミニチュアの草鞋（わらじ）と草履（ぞうり）について書いてみることにした。

草鞋と草履については30年くらい前から少しは作っていたが、ちょっと増やして、年間、草鞋、草履とも大小の各100足、計400足ほどを作るようになってから10年くらいになるか。ほしいという人にあげたり、施設等のバザーに提供している。材料は酒樽の薦被りを作る時に縛った縄の端切れをもらって作るのである。



若い人たちに草鞋と草履を見せると「えー、これなに・・・?!」と言われ、スマホしか知らないのかなーとも思う。

草鞋とは、ひもで足に結わえつけて履く、藁（わら）で作った履物で、主に男性が旅や農作業などで履いていた。しかし、明治中頃に入り乗り物（汽車等）が発達し、また、靴が普及したことで昭和10年代にはほとんど姿を

消した。しかし、第2次大戦後も地下足袋等の品不足の一時期には山仕事等には活躍していた。

草履とは、藁、竹皮、いぐさなどを編んで作り鼻緒（はなお）をすげた履物で、男女とも履いていた。1975年（昭和50年）頃までは、農村地域では春先から秋口までの暖かい日には日常生活で履いていたが、化学製品（ゴムやナイロン製）の履物が出回るとともに作る人がいなくなり、ほとんど見ることはなくなった。

草履と草鞋の歴史は、縄文時代（紀元前11世紀から紀元前3世紀まで8000年近く続いた。）に遡る。この頃、初めての土器の製作・使用、漁撈（ぎょうらう）の開始などで食生活事情を安定させ、定住し集落を形成する生活が始まった。中・晩期には植物の栽培もおこなわれたと推測されており、この時代から、蔓（つる）の皮や植物などで作られたのが始まりとも言われている。弥生時代（紀元前3世紀から紀元後3世紀末までの600年間をさす。）に入ると、稲作農業が鉄器・青銅器・紡織とともに朝鮮南部から伝えられ、稲わらで作るようになっていった。

草鞋や草履はまた、溪流釣りや沢登の滑り止めとして専用の靴が出回るまでは活躍していた。その名残りかと思われるが、受験生をもつ特に母親には「すべりどめ」として喜ばれる。高齢者の中には足が丈夫であるようにとほしがる人もおられる。気休めではあるが縁起担ぎの気持で、お守りを受けるのと同じである。

約2000年にわたって、それぞれの時代の文化と共に歩んできた草鞋・草履であり、こんなものがあつたという伝統をこれからもミニチュアではあるが作ることを続けていきたいと思っている。

（監事 高橋勇）

※次回のタイトルは、「り」から始まることばです。